

研究主題 「主体的に考え行動する児童の育成 ～読解力を高める指導を通して～」

1 「読解力」とは何か

(1) PISA 型読解力について (PISA2022 調査のポイントより)

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。

全国学力・学習状況調査 (5月) より見出された本校児童の課題

- ▲テキスト (長文や資料等) を正しく読み解くこと。
- ▲多面的・批判的にテキストを読み、そこから自分の考えを形成すること。

(2) 川津型「読解力」について

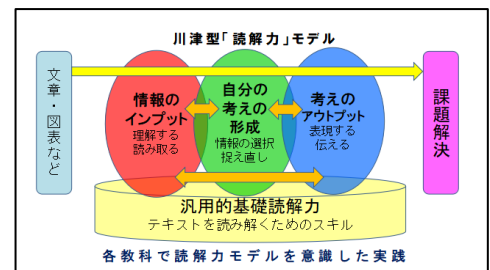
〔定義〕文章や図表などの意味を正しく理解し、必要な情報を自らの知識や経験に位置付けて考えを形成し、適切に表現する能力。

本校児童の実態から、身に付けさせたい読解力を上記のように定義した。それに基づき、読解力向上のための学習プロセスを、以下の3段階に分類した。

- ①情報のインプット……言葉の意味や文章構造の理解をしたり、グラフや図などの資料の数値を正確に読み取ったりする。
- ②自分の考えの形成……課題解決のための情報を選び、自分の知識や経験と照らし合わせてイメージをもち、それを多面的・批判的・仮定的に捉え直す。
- ③考えのアウトプット…「書く・話す・示す」という手段を用いて、自分の考えを相手に合わせて表現し、伝える。

図 1

図 1 は、川津型「読解力」モデルである。読解力向上のためには、3つのプロセスが互いに往還しながら、課題解決へと結び付けていくことが重要である。そこで、教師が授業を構成する際、読解力を高める場面で児童がつまづくのは①②③のどのタイミングか想定し、その手立てを準備しておくことで、児童は思考を続け、考えを広げたり深めたりしながら解決していく。その一連の過程が、読解力育成につながると考えた。



また、その基盤となる「汎用的基礎読解力」(新井紀子「AIに負けない子どもを育てる」より引用)を養う時間として、朝の活動の時間や総合的な学習の時間を活用した。(「よむYOMUワークシート」「読売ワークシート通信」の活用・「第15回いっしょに読もう!新聞コンクール」への参加など)

2 「読解力向上」をめざした各教科における授業実践 (一部抜粋)

図 2

(1) 3年国語科「自然のかくし絵」

ゴマダラチョウの幼虫の保護色について、文章から分かったことを思考ツール (表) に整理し、他の昆虫の保護色との共通点や差異点について、色・形・時間や場所の観点から読み取った。

(2) 6年算数「データの整理」

「20秒びったりチャレンジ」で、どのチームが一番良い値を出したか説明するために、データを中央値・平均値・最頻値・範囲で表にまとめてその特徴を理解し、ヒストグラムやドットプロットを見比べながら自分の主張の根拠を考え、伝え合った。

3 研究の成果と課題 (10の指標と教員アンケートより)

指標 4 授業や普段の生活で分からないことについて、様々な本や資料から調べようとしていますか。

5月 55% → 11月 74% (19%増)

指標 5 本や資料から分かったことを、自分の言葉で文章に書いたり発表したりしていますか。

5月 48% → 11月 64% (16%増)

- 目的をもってテキスト (教科書以外の本や新聞・資料等) を活用し、進んで読むようになった。
- 分かったことと自分の考えを分けて文章を書いたり、発言したりする児童の増加がみられた。
- ▲授業での見取りからは読解力の向上を感じるものの、すぐには点数の伸びにつながらない。
- ▲読解力向上のためには長期的な視野をもって、発達段階や系統性に応じた授業改善の道筋を探っていく必要がある。